資 料 ４

県都デザインフォーラム（H23.10.18）における提言等

■ 基調講演　東京大学副学長　西村幸夫氏

○お堀の中に県庁があるのは珍しい。ただ別に県庁が悪いわけではなく、当時お城の土地が松平家から無償貸与されたことから県庁が一番移しやすかったのではないか。歴史的な経緯の中でこのようになったものだが、今から５０年の計の中では、いろいろなことを考えていく必要がある。

○1949（昭和 24）年の地図を見ると、もともと駅舎の位置は、中央通りとお城への道が交差するところが入口になるように設計されたが、当時の国鉄が駅舎を動かさなかったため、今は駅を降りたところの見通しが少しずれている。今から駅の入り口を北側に変えるのは難しいが、少なくともこれから駅前広場を計画するときに、駅の北側を例えば公園等にするとか人が溜まれるような空間にして、お城へうまく誘導できるような工夫ができると良い。

○駅前の通りは少し曲がっている。普通ならまっすぐの道を作るはずだが、少しずつ曲がっているのは、旧吉野川を利用して作られた「百間掘」を少しずつ埋め立てながら道や線路を作ってきたからである。つまり、この道が少しずつ曲がっていることに「歴史の記憶」が残っている。これはすごく大事なことであり、例えばこの通りを「百間掘通り」と呼べば、歴史的なものがはっきるとイメージできるのではないか。

○「百間掘」のような大きな堀は日本にはない。これは川を使ったから自然に曲がっているし、お城にすごく近いところにできた。だから、駅と県庁と市役所が非常に近いところにある。駅と県庁と市役所の近さではおそらく甲府に次いで日本で２番目。しかし、福井はお城も近い。駅と県庁と市役所とお城まで入れると全部近いのは、福井であろう。こういうものを手掛かりにして、かつてこうだったということから、将来何かできないかと考えてみることが極めて重要である。

○駅からお城に行く道もあまり良い名前が付いていない。本当にお城に行く道が大事であれば、良い名前を付けるべきである。公募してでも名前を付ければ、すごく盛り上がるのではないか。

○大名町交差点は、一番中心の交差点であるにもかかわらず、そこから四方に伸びる通りの街灯のデザインが全部違うのはおかしい。こういう細かいところのデザインが抜けている。このようなことを一つ一つ直していかなければならない。国、県、市それぞれの分担があるのかも知れないが、せめてこれから先は全体でルールを決めて、総合調整していくべきである。

○大名町交差点には、以前ロータリーがあった。中央通りも側道にダブルで並木があって風格のある通りだった。これは素晴らしい大路、ブールバールだった。大名町交差点もロータリーを現代的にデザインし直せないか。真ん中にロータリーを作るのが難しければ、何らかの中心的なものをそれぞれの角が頑張れないか、少しずつ空間を出すことによって、ここに魅力的な空間を作り出すことができる。

○フェニックス通り自体は非常に立派な広い道である。こういう通りに電車が通っていること自体が非常に貴重である。しかも福武線は路面電車でありながら郊外に出ると専用軌道を走る電車である。ドイツのマンハイムではこのような電車をもう一度町に入れたいと頑張った。ドイツではこれをマンハイム形式と言っているが、福井は、図らずもこれをすでに持っていて、ＬＲＴ化しようと努力しているが、これは非常に重要である。

○福武線の終点は駅前の電車通りにあるが、これは面白い風景である。なかなかこのような終点はない。すごくすばらしい印象を受ける。ここからもう１回、駅につながるような、ビジュアルにもつながるようなことをやるのが本当に大事である。

○九十九橋東詰には、明治時代に里程標が建てられ、大正には道路元標が作られている。足羽川には城下町ではここにしか橋が架かっておらず、非常に重要な橋であり、戦略拠点であった。北国街道の入り口でもあった。九十九橋を渡ると左側に芦原街道、右側に旧北国街道である呉服町通りがある。今見ると単なる二股だが、これは江戸時代からある道と昭和にできた道で、時間差が４５０年くらいある。このような所にこのまちの大事な遺伝子みたいなものがあって、それをうまく活かしていくことができるのではないか。

○お堀の周りには、ふつう幹線を通して、「堀端通り」と呼んで大事にしているが、福井の場合はお堀を埋めながらまちができてきたので、堀端はあまり大きな幹線になっていない。逆に言えば、車がビュンビュン通る道になっていないので、人間が歩いて楽しめる道に変えればよい。他のまちでは逆にそれができなくなっている。新しい感覚で「２１世紀型の堀端通り」はこれだというものを作ってはどうか。北堀端通り、東堀端通り、南堀端通り、西堀端通りと名前を付ければ、とても魅力的な歩けるネットワークができる。

○通りに名前を付けることなどは今からすぐにでもできるし、特にお金もかからない。そうやって関心を高めてもらうことが大事。特にまちを一番使っている高校生がうまく楽しめたり、ちょっとしたことで時間を過ごせたり、面白いと思ってくれるようなことを工夫したり、彼らに話を聞いてみたりすれば、いろいろな形の手掛かりが広がっていく。こうしたことを通じて、この福井のまちを今後どうしていったら良いかということに関してイメージが湧いてくる。

○今から先のことを考えるのに、単に夢を語るだけだと、人それぞれ夢が違うので合意できなくなる。しかし、過去にこうなって、それが今はこうなって、でもこれから目指すのはこの方向だと考えれば、流れができてくる。そうすると、このまちの行くべき方向が見えてくる。だから過去が大事なのである。

■ 特別講演　由布院温泉観光協会会長　桑野和泉氏

○まちづくりはすぐにできるものではない。滞在型の保養温泉地を目指すのであれば、澄んだ空気、静けさ、空間を作るのに１００年くらいかかる。まちづくりをしていくということは、それくらいの覚悟を持って１００年の単位でやるということが大事である。

○まちづくりは１年とか１０年とかではなく５０年という単位でやっていくので、どの世代も必要である。どの世代の方も議論できる場をどのくらい持てるか、また、外の人たちが入ってきて議論しながら一緒に作っていく。風通しの良い空間を作って、その中でどんどん知恵をもらっていく、その知恵をもらいながら自分たちでまちを変えていくことが重要である。

○由布院では出会いの場を作っていった。外の人たちが入ってくることによって、自分たちのまちの強み、弱みが分かる。そこに共通のわくわくすることがあると良い。由布院では映画祭が３７年続いている。音楽祭も最近まで３５年間あった。そこにしかない出会いの場を作ることで人が集まり、滞在してくれる。

○３０年間でまちはどんどん変わった。お店が２軒あったところに２００軒増えた。こうなると暗黙のルールではだめで、建築や景観のルールが必要になる。景観法に基いてルールをつくり、今あるものを自分たちで全部調べて、地域の人たちに説明して、これが市の景観計画になった。２年かかったが市民が自ら参加しているので、その後が違う。ある店は看板を下ろした。新しい店を作るときも計画段階から相談がある。一緒に生きていくというのは、暗黙のルールがあったならそれを形にしていくということである。

○いつも議論をして前へ進むかというと、決してそのようなことはない。いつも賛成が９割などなく、だいたい６：４とか、７：３である。皆が賛成、皆が反対ということはない。しかし、皆が何かを語れる、何かを議論できることが大事である。議論の場を作り続けていくこと、あきらめないことである。

■ 意見交換会

○中心部に活気がないかというとそうではなくて、そこに住む人たち、そこを訪れる人たちの関係性が希薄になっているということが見受けられる。人のつながりを復活させることが大事である。

○郊外にはリーダーがいて、リーダーを支える組織がある。しかし、街なかでは、そのような組織があまり見当たらない。むしろ個人主義的な方が多い。どうすれば人と人が積極的に意見を述べ合って、前に進んでいく議論ができて、それをまちづくりに反映していけるか。郊外の方と街なかの人が同じテーブルについて議論をすると、なかなか意見がまとまらないが、そこから新しい感性が生まれて、地域に持ち帰るとまたそこで新しい議論が起きる。このようなやり方を通じて福井のまちづくりに活かす方法を検証している。

○住民主役のまちづくりということであれば、本気である人がどれくらいいるかしかない。本気で一生をかけてこれをやり抜くという覚悟を持った人の周りにまた人が集まる。それには、地域の中だけではなく、応援団が外から励ましてあげるなどの関係性があることが大事である。

○県庁も市役所もどこかには建っていないといけない。今から大きくものが動く時なので、考えるよいきっかけである。その時にもう一度、お堀の中はどうあるべきかときちんと考え直して、大きなビジョンで全体を考えることが重要である。

○城跡を将来どうするかというビジョンがないと、櫓を復元するといってもいろいろと選択肢がある。全部復元ということもあるし、もう少し公共との関係もある。同時に、そこにもうちょっと目が行くような工夫をするとよい。例えば彦根城は水面に光を当ててその反射で石垣を照らしている。そうすると波の雰囲気が石垣に映って動きが出る。せっかくお堀が四方にあるのだから、効果的にライトアップして魅力的にするのは今でもできる。みんなの意識をこちらに向けて、これは大事だということを発信しながら合意を形成したり、将来ビジョンを描くことが大事である。

○福井は何もないのではなくて、見れば本当にいろいろなものが見えてくる。見るということを住民が日々の中でやっていくこと、その積み重ねの中で我々が生きているということに対して、過去の資産に敬意をもって接して、それを将来に向けてどうしていくか、その意識の共有ができれば、一番大きな住民主役のまちづくりのスタートになる。加えて、それを子や孫にいかに継承していくかという責務を共有できれば、持続可能なまちづくりの福井なりのプロセスが生まれてくる。